IS外伝―シャルと一夏の共同生活―

じょんぺい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ外伝―シャルと一夏の共同生活―

【Ｎコード】
Ｎ１９０１Ｕ

【作者名】
じょんぺい

【あらすじ】
一夏とシャルがただただ甘い生活を送っていくだけのほのぼのストーリーです。戦いなんてありません、登場人物もこの二人以外滅多に出ません。言うなれば、シャル√。大胆だけどちょっぴり強がり、そんなシャルと一夏の共同生活です。作者の妄想大暴走です。
※もともと短編で出していましたが連載に切り替えさせていただきました。

ルームメイト（前書き）

シャル、一夏と同じ部屋での生活――――

ルームメイト

「一夏のシャツ・・・一夏のシャツ・・・」

目の前にあるのはベッドに脱ぎ捨てられた一夏のシャツ、と言うか肌着、そして一夏は特訓の終わりでシャワーを浴びに行ってる、その上、今この場にいるのは僕だけ。

僕はおもむろに一夏のシャツを手に取る。ちょ、ちょっとくらいなら・・・バチはあたらないよね？ゆっくりシャツを自分の顔に近づけて、そのまま匂いを・・・

い、いや！これは流石に！こんなことバレたら一夏にひかれちゃう！で、でも・・・ちょっとくらいなら・・・待った！そこは人として！人のシャツの匂いをかぐなんて！・・・だけどかいでみたい・・・ああもう！なんなのこの葛藤！

「・・・・・・」

・・・そういえば、この間読んだ小説に“好きな人の匂いをかぐことは恥ずべきことじゃない”って書いてあったよね？じゃあ、大丈夫だよね？匂いをかいでも・・・ちょっとだけ、ちょっとだけだから・・・

「あー、サッパリしたー」

「ッ！！？」

突然聞こえた声に驚いてシャツを体から引き離して、その勢いでババッ！と一瞬でシャツをたたんだ。

「あれ？シャツたたんでくれたのか。ありがとうなシャル」

「う、うん！これぐらいは気にしないで！」

一夏はタオルを首に巻いてシャワー室から出てきていた。いきなりは心臓に悪いなぁ・・・・

バレなくてよかったと内心ホッとしてる僕と、よくあんな一瞬でシャツをこんなに綺麗にたためたなと感心してる僕がいる。

でも、いつかかいでみよう、なんて心に誓いを立ててみたりする僕もいる。

「ああもう疲れるぜ・・・・・なんだってアイツらあんなに容赦がないんだ？俺まだＩＳの初心者だぜ？明らかに殺意向けてきやがって・・・」

「あはは・・・・」

箒たちが厳しいのはきっと僕のせい、なんて言葉は口に出さないでおく。これは一夏が自分で気づかなきゃね。

「ちょっと横になる…」

そう言って一夏は僕の座っているベッドの隣のベッドに倒れこんで枕に顔を深くうずめた。僕は一夏の寝ているベッドへ座りなおして優しく後頭部をゆっくりとなでなでした。

「お疲れ様」

「むー……」

「マッサージでもしようか？」

「むう」

一夏は頷くように顔を枕へと鎮める。これは肯定の意思表明だね。それを確認してから僕は一夏の上にまたがる。

「じゃあいくよ？」

「むー」

ぎゅっ、ぎゅっと背骨にそってその横の筋肉を親指で指圧していく。首筋から肩、肩甲骨を通り越して腰へと降りるようになぞっていく。じわじわと力を加えてゆっくりとマッサージ。これを何回も往復していく。
時々一夏から「むふぅー……」と息が漏れるのが面白い。気持ちよくなってくれてるのかな？

「気持ちいい？」

「むう……はぁ……うん、気持ちいいよ」

よかった、ちょっとマッサージの勉強をしておいて正解だったみたい。わざわざ顔を上げて気持ちいいって言ってもらえるのはすごく嬉しい。

「シャルー、肩揉んでもらってもいい？」

「うん！じゃあ座って」

「解った」

一夏はうつ伏せの状態から起き上がってベッドの横に腰掛ける体勢になった。僕も肩がもめるようにベッドの上で膝立ちになる。

「わるいな」

「これぐらい全然大丈夫だよ」

「うん、ありがとな」

首だけこっちに向けて爽やかな笑顔をぶつけてきたもんだから、僕の顔が燃える様に熱くなってしまった。

「う、うん・・・・それじゃ・・・・」

僕は真っ赤に染まった顔を極力見せないようにしながら肩揉みを開始する。こっちは背中と違って親指の先じゃなくて親指の腹でゆっくりさするようなマッサージにする。

「はふぅ・・」

なんて、一夏が色っぽい声を出すもんだからちょっとこっちもそんな気になってしまう。

「いやぁ、シャルはいいお嫁さんになるなぁ・・」

「およ――――!?」

ぎゅうううううう！！

「あ痛ッ！！」

思いっきり一夏の肩に親指をもぐりこませてしまった。

「あ！ご、ごめん一夏！！」

「てて、急にどうしたんだ？」

「だ、だって！一夏がいきなり、その、お、おおおおお嫁さんなんて言うから・・・・」

一夏の発言は時々吹っ飛んでいるから不意打ちを食らうことが多くて困る・・・最近は慣れてきたと思ったのになぁ・・・・
まぁ大体の発言は嬉しいことだけどね。

「ん、ありがと！大分疲れが取れたよ」

「そう？じゃあ・・・えい！」

さっきの不意打ちの仕返しとばかりに、一夏の首に腕を回して後ろから抱きつく。

「うおっ！？シ、シャル？」

「今度は、僕を癒してよ・・・・ね？」

「お、おう・・って、これだけでいいのか？」

「うん！充分だよ！」

僕が笑うとこっちを見ていた一夏の顔が真っ赤になった。ふふ、可愛いなぁ。しばらくこのままでいたいなぁ・・・・ご飯の時間までこうしてたいなぁ・・・・

「・・・・な、なぁシャル」

「なぁに・・・・？」

「その、シャルの・・・・が、な。思いっきり背中に押し付けられてだな・・・・」

一夏の背中に目を向けると、ボクの胸が一夏の背中に密着していた。

・・・・・・・まったく、一夏ったら。

「・・・・一夏のえっち。触りたいなら触りたいって言えばいいのに・・」

「違うわ！！」

「……一夏は、触りたくないの？」

「うっ……」

僕が耳元でそっと囁くと一夏の顔が今度は耳までゆでダコみたいに真っ赤っかに染まっちゃった。ホントに可愛いんだから。

「も、もういいだろ？女の子がそんなに大胆なことしちゃダメ！」

「僕たち男同士、でしょ？」

「学園じゃあな、でも性別学上は女の子！」

僕の正体が一夏にバレた後、正式に学園に女の子として学園に申し出に行ったんだけど、どうにも学園の設定が面倒なことになってるみたいで変更するのが難しいみたいだから、学園の登録名を“シャルル”から“シャルロット”に変えることだけをして僕の手続きは終わっちゃった。

周りのみんなからは“女の子”として見られてるけど、書類的には“男の子”のままだから一夏とは相部屋のまま。他に部屋を用意するのも手間がかかるみたいだから、今更引っ越さなくてもいいと学園に言ったら案外すんなり通っちゃったからよかった。ちょっと不思議だけど……一夏と毎日一緒にいられる時間が増えたんだから気にしないことにしてる。

「俺はシャルを女の子として見てるの！」

「それは嬉しいな、僕のこと女の子って意識してくれてるんだ？」

「あ、当たり前だろ・・・・その・・・・し・・・・」

一夏は俯いてボソボソとしゃべるようになってしまって何て言ってるのか聞き取れない。

「なぁに？」

「その、な？シャル・・・・可愛いし・・・・」

「っ――――」

言った途端一夏は顔を真っ赤にしちゃったけど、言われた僕も相当恥ずかしくて真っ赤になっちゃった・・・・

「「・・・・・・・・・・」」

ちょっとの間沈黙が流れる。

「・・・そ、そろそろ夕飯じゃないか？」

「そ、そうだね。準備しなきゃ・・・」

一夏の一声をきっかけに僕たちは準備をし始める。けどやっぱり一夏の今の言葉が頭に焼き付いて離れない。

「・・・ねぇ一夏」

「な、なんだ？」

「もう一回、言って？」

「なっ！？」

「お願い、ね？」

「う・・・・か、可愛いよ、シャル・・・」

顔を真っ赤にしながら一夏はさっきの台詞を口にしてくれた。ダメだ、もう我慢できない・・！

「一夏ぁ！！」

「おわっ！？」

僕は思わず一夏の胸に飛び込んでベッドに押し倒してその胸に顔を沈める。

「一夏ぁ・・・・・はふぅ・・・・」

「全く、猫みたいなことを・・・・」

一夏が恥ずかしさを堪えるために天井を見つめて僕から視線を外したスキに一夏の頬に顔を寄せて――――

「ちゅっ♪」

「ッ！？」

これ以上ないってくらい一夏の顔に血が上って頭から煙が出てきた。

「シ、シャル！」

「えへっ♪これはスキンシップだよ？スキンシップ！」

「だからって不意打ちは困る・・・・心の準備ってのが・・・・」

「チュッ♪」

「っ！！ま、またいきなり！」

一夏が愛しくてたまらない。このあと続けて三回も頬にキスをする。

「さあ！今度は一夏から！」

「落ち着けシャル！暴走してるぞ！！」

「そんなことないよ？いつも通り！」

「・・・自分の顔をよく見ろ」

そう言って一夏は僕に手鏡を差し出してきた。それを受け取って鏡の中の自分を確認してみる。

「あれ？」

そこには、嬉しいはずなのに、顔を真っ赤にして目に涙をためてる僕がいた。その涙を服の袖で拭うけど、どんどん涙は溢れてくる。

「お、おかしいな？別に、イヤじゃないのに、こ、怖くも無いのに――――」

「シャル」

突然体にぎゅっと覆われる感覚が襲ってきて何をされたかよく解らなかった。

「落ち着け、焦らなくてもいいから、な？」

数秒ほどの時間をかけてようやく自分が何をされているか気づいた。一夏が優しく僕を抱き締めて、僕の頭を自分の胸に埋めてくれて、背中をさすってくれていた。

「ゆっくりでいいよ、逃げやしないから」

「……ホント？」

「ああ」

「…解ったよ、けど、もう少しこのままでいい？」

「もちろん、断る理由がない」

「…じゃあ、お言葉に甘えて…」

ゆっくりと目を閉じて一夏に体を預ける。それから暫くの間、ずっと一夏に抱き締めてもらっていた。すごく安心する。ああ、やっぱり僕は、一夏がこんなにも好きなんだな。

「シャル」

「なに？」

その時、僕の頬に暖かくて、柔くて、優しい何かが触れた。

「え？」

「スキンシップなんだろ？勇気のいるスキンシップだな、これ」

「――――――え？」

何をされたか全く解らなかったけど、暫くして段々と頭が状況を把握していく。

「え、ええ？えええええええええええええええええええええ！？」

「こら落ち着け」

「お、おお、おおおおお落ち着けないよ！！一夏がいきなりほっぺに――――」

ちゅっ

「する、から……」

「これくらいならいくらでもしてやるから、今は落ち着け、な？」

「……うん」

ぷしゅー、と頭がショート寸前になりながら一夏に体を預ける。

僕の胸の鼓動がさらに高鳴ると思っていたけど、不思議とゆっくりと落ち着いてくる。一夏の胸はすごく癒される。

「……一夏」

「どうした？」

僕も一夏の背中に腕を回してぎゅっと抱き締める。その後、箒が晩御飯に呼びに来るまで僕と一夏は抱き締めあったままだった。

「一夏、大好き♪」

ルームメイト（後書き）

感想、意見、指南よろしくお願いします！

後悔なんてありません！

デパートにて（前書き）

今回はあくまで最後のが書きたかっただけですw

次回からもう少し部屋で深くイチャイチャさせますw

デパートにて

「一夏ぁー！　おまたせー！」

駅のモニュメント近くのベンチに座っている一夏に駆け寄っていく。それに気付いた一夏が手をあげて立ち上がった。

「ゴメン、待った？」
「いや、今来たところだ。それよりシャル」
「なあに？」
「何で駅で待ち合わせなんだ？　一緒の部屋なのに」
「……一夏は一回ちゃんと乙女心ってのを理解したほうがいいのかもしれないね」

僕と一夏は今日は駅前のデパートで一日使って買い物したり見たりする。つまりは、で、デートみたいなものをしにやってきた。
折角のデートなんだから駅で待ち合わせにしたって言うのに……全く、相変わらずデリカシーが無いと言うか、少女の気持ちが理解できてないというか……

「よく解んないけど……今日は一日暇だし、精一杯楽しもうぜ？」

一夏はそんな僕の心の中のことなど気づくわけもなく、ただただ笑顔だった。

「……その一夏の女の子の気持ちに対する鈍さは誠意で挽回してもらうから、覚悟してね？」
「？」

何を言われているか解らないのか、一夏は首を傾げるだけだった。ホントに鈍感なんだから……

僕と一夏は並んでデパートに入った。さりげなく一夏の腕に抱きついてみた。始めはすごく驚いていたけど、抵抗しないでくれたのが嬉しかった。

◇　◇　◇

「一夏、一夏！　見て見てこのワンピース！」

シャルは真っ白なワンピースをあてがって俺の前でクルリと一回転した。

「お、いいんじゃないか？　真っ白なのシャル似合いそうだ」

「ホント！？　じゃあちょっと着てみようかな……」

シャルはどうしょうか迷ってるみたいだったから、少し背中を押してやる。

「試着してきてもいいぞ？」

「うん！　じゃあちょっと着替えてくるね！」

そう言ってシャルは直ぐ近くの試着室に入っていった。

シャル、楽しそうだな。今日思い切って誘ってみて正解だった。デパートに買い物を誘うだけでも結構勇気がいるもんなんだな……プレイボーイとか言う奴らはどんな神経してるんだか。

それにしても……これっていわゆる……で、デートって奴じ

ゃないだろうか？あの恋人同士がするっていう……
た、確かに、その……頬ぐらいにはしたものの、俺たちって恋人なのか？　シャルの方からは好きって言われてるけど……俺からは一回も言ってないし。かと言って、今更口にするのもちょっと億劫だし……はぁ……情けないな、俺。
こんな不甲斐無いの、弾に話したりしたら確実に“このヘタレ！どヘタレ！！”って罵られるのが安易に想像できる。
かと言って、切り出すタイミングが掴めないし……

「どうしたもんかな……」
「いっちか！」
「おわっ！？」

考え事をしていた最中に急に声をかけられたもんだから、思ったよりも大きな声を出してしまった。

「着替え終わったよ？」
「あ、ああ、悪い。ちょっと考え事して――――」

シャルの声に振り返ってシャルの姿を視界に入れる。

「どうかな？」

シャルは少し顔を赤らめてクルッと回って見せた。
真っ白でシンプルなワンピース、髪を束ねるリボンは解いて頭にはちょっと大きめな麦わら帽子を頭に被り、腰には大きな黒いリボンのようなものを巻いて、靴は靴下ごと縫いでいて、リゾート感が漂うような大きなターコイズの石がちりばめられたビーチサンダルのようなものを代わりに履いていた。
まるで物語の中に出てくるような可憐な少女が姿を現して飛び出

してきたようで、見とれてしまった。

「一夏？」

「あ、うん、その、か、可愛いな」

ちょっと感動に浸っていたからうまく言葉がでなかった。言葉がにならないとはこのことか。

「むー？　反応が良くないなぁ……」

「え？」

しかし、シャルには逆の意味に感じたらしい。ちょっと顔ががっかりした感じに見える。

「あんまり似合ってないのかな……」

「そ、そんなことない！！」

つい大声を上げてしまったので、店のスタッフや他の客の注目が一気に集まってしまった。

しかし、その視線は一瞬は俺に向けられていたが、直ぐにその視線は隣の可愛い少女へと移っていた。

「い、一夏、恥ずかしいよ……」

シャルは顔を真っ赤にして、試着室のカーテンを手に掴んで体を隠すように全身に巻いていたが、もう手遅れな気がする。

「よ、ようはアレだ。それだけ似合ってるってことだよ」
「……ホント？」
「おう、似合ってる、可愛いよ。一瞬見惚れちゃった」
なんてちょっと臭そうなことを言ったらシャルの顔が急に赤くなった。
「じ、じゃあ、これにしようかな……海とかこれで行けそうだしね」
どうやらシャルの機嫌も戻ったらしい。シャルは手にとっていたカーテンを離してもう一回クルッと回った。　そのせいでちょっとワンピースの中が見えてしまったのは秘密だ。
「……よし、じゃあ着替えておいで。会計済ませよう」
「うん！」
シャルは再び試着室の中へと戻っていった。よし、さっきの着替えの時間から考えて五分は余裕があるな。
それを確認してからこっちを見ていた近くにいるスタッフに声をかける。
「あの、今の女の子の服なんですけど……」
◇　◇　◇
「お待たせ一夏！　じゃあお金払わなきゃね！」

試着室から出ると、一夏が立ったまま待っててくれたのがちょっと嬉しかった。

「ああ、レジに持っていこう」

「お会計ですか？　それではお預かり致します」

僕の買う品をスタッフの人が持ってレジまで小走りで持っていってくれた。

「じゃあ会計済ませてくるね」

そう言って僕はレジに一人で行った。すると、レジのスタッフの人がニマニマと笑っていた。

「あの、何でしょうか？」

ついつい気になって尋ねてしまった。

「お金なら要らないわよ」

「え？」

「さっきね、あの男の人が全額出してくれたわよ。ラッピングの代金も含めてね」

そう言ってスタッフの人が取り出してくれたのは、まるで記念日にプレゼントを贈るような立派な包装をされたさっき試着した品々だった。

「はい、これカード。ちゃんと読んでおいてね」

またしてもスタッフの人がニマニマしながら、新たに取り出した

二つ織りにされたグリーティングカードのようなものをプレゼントのリボンの部分に差し込んだ。

「ありがとうございました、またお越しください」

「あ、はい」

状況がよく理解できないままレジを後にする。

「終わったな。よし、次行こう」

一夏は僕に顔を見せないようにそそくさと僕の先を歩いて行ってしまった。それより、このカードが気になって仕方ない、僕はそっとカードを開く。

“初デート記念、織斑一夏より”

そこにはそう書かれていた。

「……口でデートって言うのが恥ずかしいからって、遠回しなんだから……」

「シャルー、行くぞー？」

「あ、待って！」

初めてもらったプレゼントを両腕で抱え込むようにして僕は一夏の後についていった。

◇　◇　◇

「えへへ……」
「……シャル、こっちを見ながらどうした？」
「何でもないよ？えへへへ！」

買い物も一時中断して今はカフェで一休み。注文も終わって品物が出るのを待つまで手持ち無沙汰なわけなんだが……
さっきからシャルの顔が緩んでいる。
あれ、喜んでもらえたのかな……？　それなら嬉しいんだけど……まあそれなりに値が張ったからな、明日からちょっと節約しよう。

「お待たせしました。アイスティーと白桃のシフォンケーキでお待ちのお客様は……」
「あ、僕です」
「はい、かしこまりました。ではこちら、アイスコーヒーと苺のショートケーキです」

シャルの前に紅茶とケーキを置いてから俺の前にもコーヒーとケーキが置かれる。ほんのりと香る紅茶とコーヒーの香りが疲れをとってくれた。

「失礼します」

ウェイトレスは一礼してから去っていった。しっかりとしたお店だと感心する。

「いただきます！」

「うん、いただきます」

シャルは目を閉じてケーキを頬張り、ゆっくりと口の中で味わってから喉へ送り込む。

「んー、おいしい！　ここのお店評判いいのが納得できるね！」

シャルが蕩けそうなな顔で感想を述べてきたので、俺の食欲もそそられる。

「どれどれ……」

俺もケーキを一口食べる。滑らかな生クリーム、きめ細かなスポンジ、ちょっと酸味の効いた苺がアクセントになっていて……

「うん、旨いな」

そのままコーヒーを口にする。甘いものを食べた後だから苦さが際立ってこれがまたいい。ちょっと大人の味だ。

「ねえ、一夏のケーキも食べたいな？」

なんてちょっと気取ったことを考えていると、シャルが物欲しそうな目で俺のケーキを見つめていた。

「ん、いいぞ」

「じゃあ……」

シャルは目を閉じて口を開け何かを待っていた。

「……まだ？」
「待てシャル。まだってなんだ、まだって」
「え？　あーんしてくれないの？」
「ぶふっ」

ちょっと吹き出してしまった。今コーヒーに口をつけいなかったことを非常に幸運に思う。
それにしても、あーんだと？　何て言うか、それって結構高度なものだと思うんだが……まだ正式に付き合ってるわけでもないってのに……

「して、くれないの…？」

ウル目で上目遣い、ここまでされたら断れない、これは男の性なんだろうか……いや、シャルが可愛いのが問題な気がする、そうに違いない。

「そ、それじゃ……」
「うん！」

思ったよりもさらに可愛く反応するシャルに、不覚にもときめいてしまった。

「……あ、あーん……」
「あーん」

フォークで切り取ったケーキをゆっくりとシャルの前に差し出す。
それをパクっ！と勢いよくシャルは口に加える。

「……」

この感想が出るまでの間がどうにももどかしくて恥ずかしい。顔が赤くなってるのが自分でも解る。

「うーん、こっちもおいしい！」

「そ、そうか」

これ、映画とかでよく見るけど……よく出来るな、こんなこっ恥ずかしいこと……やってと頼まれない限りやらないぞこんなこと……

「じゃあ、次は一夏ね！」

「え？」

予想外のパスが飛んできて対応が出来なかった。断ろうとしたが時既に遅し。

「はい、あーん！」

目の前に差し出されているのはシャルのフォークにのった桃色のケーキ。これはもう逃げられない。

「一夏、ほら、あーん！」

期待が非常に籠った眼差しで見つめられる。これで断れる奴がいたら見てみたいものだ……よし、腹を括ろう。

「……あ、あーん……」

「あーん！」

ゆっくりと前に突き出されてくるケーキに意を決してパクッ！と

食らいつく。ほんのり香る桃の香りとしっとりとしたシフォンケーキの中に閉じ込められた甘味が旨かった。

「おいしい？」

「お、おう。旨いな」

多分、食べさせてもらった影響も少しはあるが、口には出さないでおこう。

そのあとも何回か食べさせあったが、慣れるなんてことはなかった。

◇　◇　◇

「んー！　楽しかったぁ！」

デパートを後にして、僕は一足先に自室へ戻ってきた。一夏は帰り道に織斑先生に電話で呼ばれてちょっと学校に寄るとのことだった。

その一夏に買ってもらった服はまだ封を開けないでクローゼットへ仕舞ってあるけど、プレゼントに付いていたカードだけは僕の手元にある。

「“初デート記念”……えへへぇ……」

どうしてもにやけてしまう。一夏と僕の初デート、しかも可愛いコーディネート一式買ってもらっちゃったし、一夏もデートって思っててくれたことがすっごい嬉しい。

でも、デートって恋人同士がやることだよね？　僕からは好きっ

て言ったことはあるけど、一夏から直接は一回も言ってもらってないな……ああもう！　一夏の根性なし！
僕は自分のベッドじゃなくて、一夏のベッドに飛び乗って枕に顔を埋める。

「ちゃんと口にしてくれればいいのに、一夏のバカ」
「バカ？」
「そうだよ、大体一夏は――――――」

そこで言葉が詰まる。今ここにいるはずのない人物の声が背後から聞こえたからだ。

「い、一夏！？　なんでいるの！？」
「なんでって、ここ俺たちの部屋だろ？」
「いや、そうじゃなくて。先生に呼ばれたんじゃなかったの？」

学校寄ってここに帰ってきたにしては異様に早い帰りだもん……ホントに心臓に悪いよ……

「ああ、行く途中で千冬姉に会ってな。渡すもの渡したし、伝言はちゃんと聞いたし問題ないよ」
「渡すもの？　伝言？」
「ああ、前々から頼まれてた書類。あと伝言は……セシリアと鈴からだったが」
「セシリアと鈴から？」
「ああ、“シャルだけじゃなく私たちにもケーキをおごれ”ってさ」
「……え？　それって……？」

僕が一夏と一緒にケーキを食べにいったのは今日が始めてだ。ということは、つまり……

「ああ、見られてたみたいだな。今日の、その、で、デート……」

あれが見られていたと解って、二人そろって顔を真っ赤にする。

え？ちょっと待って。見られてたって、あのケーキの食べさせ合いも腕に抱きついていたのも一部始終全部見られてたって事？

思い返しただけで顔が焼けそうだよ……誰も見てないだろうと思って油断しすぎてた……

「……こりゃ休み明け大変だな……」

一夏は笑って頭をかいていたが、見られていたって事実が相当恥ずかしかったのか、まだ顔が真っ赤だった。僕も一夏のことは言えないけど……

「う、うん……」

「まあ、後悔は、してないよ。俺は」

「え？」

そこで、一夏の口から飛び出した言葉は意外なものだった。あの唐変木の一夏からこんな気の使うような言葉が出るなんて思ってもみなかったからだ。

「その、一緒に買い物できて楽しかったし、嬉しかったし……」

一夏が言いたいことを言い終わった後、直ぐに後ろを向いて顔を隠してしまった。

でも一夏、耳が真っ赤だから顔も真っ赤なのバレバレだよ。

「……デート、またしような」

そこでようやく気付いた。さっきから一夏、デートって言ってくれてる。それって……

「……ねぇ一夏」

「お、おう？」

「僕の事、好き？」

「んなッ！？」

顔を真っ赤にした一夏がこっちを振り返った。僕もこんな聞き方をするのは反則だと思うけど、いい加減にハッキリしてもらいたい。

「デートって、恋人同士がすること、だよね？」

「ま、まあ……そうだな」

一夏の顔にちょっと焦りが見える。少し急すぎた気がしないでもないけど、構わずに言葉を紡ぐ。

「それって、僕の事、そうやって、見ててくれてるの？」

声が震えているのが自分でも解った。正直、ちょっと怖い。

あの唐変木の一夏だから、何を言うか油断できない。家族のことから来てる同情、なんてことがあったらもう精神的にちょっとキツイ。

僕の事をちゃんと見ててほしい、でも、それはルームメイトとかってだけじゃなくて、ちゃんとシャルロット・デュノアとして、一人の恋する女の子として見てほしい。僕の緊張して強張った表情を見て、一夏の顔も真剣になる。

「……ふぅ……おし。シャル、ちょっとおいで」

「？」

何かを決意した一夏が手招きをしたので、僕はベッドから立ち上がって一夏のそばによっていく。

「そらっ！！」

「きゃっ！？」

急に体がふわりと浮いた。何が起きたか一瞬解らなかったけど、頭の上に一夏の顔が見えてようやく状況が理解できた。

一夏が僕をお姫様だっこしている。

「俺、不器用で鈍いからさ。いつまでも口に出さなかったのが悪かった」

「い、一夏……？」

急にお姫様だっこなんてされたから、心拍数が高くなって体が固まってしまう。

「俺の気持ち、全部シャルにやる！！」

「っ」

一瞬、何を言われたか解らなかったけど、直ぐに何を言われたか頭が理解した。そう望んでいたことがあったからだ。

「だから、これから、その、なんだ……正式にお付き合いいただけると――――――」

その言葉を聞いて、この溢れんばかりの気持ちを自制なんてできなかった。

「一夏……」

一夏の首の後ろに手を回してグイッと顔と顔を引き寄せる。そして、僕と一夏の唇が優しく触れ合う。

「ッ――――――」

「離してって言っても、返してって言っても！　もう僕のものなんだから、絶対に渡さないからね！！」

目から積もり積もった感情があふれて、それはとどまることを知らなかった。

「ゴメンな、今までハッキリさせなくて……」

お姫様だっこをした状態で、一夏は優しく僕の頭を撫でてくれた。満たされていた気持ちがさらに増していく。

「ホント、待たせすぎだよ……やっぱり一回ちゃんと一夏は乙女心を理解したほうがいいね……」

もう一回、一夏唇に触れるだけの口づけをする。

「これから僕がイヤってほど解らせてあげるから、覚悟してよね！」

「……ははは、お願いするよ。優しく指導してくれよ？」

人生で、今日だけで三回目キスをする。今度は僕からじゃない。かと言って、一夏からでもない。引き寄せあうような自然なキス。二人の気持ちが引かれ合って生まれた口付け。

甘い甘い、最高の1日だった。

デパートにて（後書き）

どうも、じょんぺいです

うーむ、ちょっとまとまりきらなかったですかね……

ここにもう少しイベントがあってもいいかと思ったんですが浮かばず……

次回はシャルがちょびっと暴走しますw

感想、ご意見、お待ちしておりまーす！

評価、お気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます！

イタズラ（前書き）

遅れて大変申し訳ないです！！

イタズラ

パチッ。

「……あれ？」

目蓋が何の前触れもなくパッチリと開いた。結構深く寝ていたはずなのに、急に天井が視界に入って驚いた。

今何時なのか気になり、枕元を探って携帯を手にとって時間を確認してみる。

「……四時……」

真っ暗な部屋を照らしている携帯のディスプレイにはハッキリと四時と表示されていた。

何故かこんなに朝早くから目が覚めてしまった。それもかなりスッキリと。まだ起きなくてもいい時間なのに……

「たまにあるよね……妙に目覚めがいいときって……」

仕方がないね、ちょっと早いけど起きちゃえ。こうなったら顔も

洗ってさっぱりしちゃおう、そう思い立って僕は洗面所に向かった。ちょっと歩みがフラフラするのはまだ体が完全に起ききってないからだろう。頭は完全に目が覚めちゃってるから、なんか地面が揺れているように感じる。

洗面所に行く途中、まだ寝ているであろう一夏のベッドに目をやった。

「……やっぱり、まだ寝てるよね……」

一夏のベッドからは静かな寝息だけが聞こえる。起きてる気配は一切しない。一夏ってば男子なのに可愛い寝息をたてるよね。

「……顔洗おっと」

僕はちょっと残念に思いながら、洗面所に顔を洗いに行った。

◇　◇　◇

顔を洗ってしっかりと目を覚まして戻って来たけど、一夏のベッドからはまだ寝息が聞こえる。

「……くー……すー……」

……うーん、ちょっと寝顔を見てみたいな。これだけしっかり寝てるなら気づかれないだろうし……

そう思い立って、僕は一夏のベッドの横で膝立ちをすると、丁度目の前には一夏の寝顔があった。

「……んー……くー……」

一夏の寝顔を拝見。ほんの少しだけ開いた口から漏れる呼気、目はしっかりと閉じていてまだ開きそうにない。

ふふっ、一夏ったら本当にグッスリ寝てるね。ちょっと面白そうだし、イタズラしちゃおっかな……

試しに人差し指で一夏の頬っぺたにむにゅっと突っついてみる。

「……ぷふー……すー……」

何か不思議な音が口から聞こえた！　息が口から漏れたんだろうけど、これは楽しいな。

「……くー……」

「えい！」

むにゅっ。

「ぷふー……」
「えいえい！」

むにゅむにゅっ。

「……ぷっ……ぷふー……」

これだけやって起きないのか……一夏ったら休みだからって気を抜きすぎだよね。僕個人としては面白いからいいんだけど、今日は午後から織斑先生のお手伝いをするって言ってたから早起きしてシャキッとしないと。でもまだ起きるには早い時間なんだけどね。
よし、じゃあ起きるまでイタズラし続けよう！
それじゃあ先ずは……

「……お、お邪魔します……」

一夏の掛け布団を半分捲って一夏のベッドに潜り込む。そして掛け布団を元に戻してみる。

「……んん……」

わ、わわっ……一夏の顔がすっごく近い……！　こ、これは何て言うか、思い付きでやってみたけど……いいなぁ、これ……！！　新婚さんが一緒のベッドに寝てる雰囲気ってこんな感じなんだろうなぁ……毎晩毎晩旦那さんの寝顔をじっくりと舐めるように見詰める……ああ……なんて幸せそうな生活なんだろう……

「……くー……」

でも、ちょっとこれは危ないね……我慢できなくなっちゃいそう。目的はどれだけイタズラ出来るかだもんね！　我慢我慢……ちょっと初めからハードル高いのやりすぎたかな……？

名残惜しい気持ちで一杯だけど、一夏のベッドからゆっくりと脱け出した。あ、まだちょっと一夏の温もりが……えへ……

でも、ちょっとくらい密着したいなぁ……あ、じゃあこうしよう。

僕はもう一回一夏の掛け布団を捲って、今度は一夏の背中側に潜り込んだ。

「……それじゃ、えいっ……！」

ギュッ……と、一夏の背中から抱き着いてみた。

うわっ……！　これ、すっごくいい……！！　一夏と密着してるってだけでも相当ドキドキするのに、一夏が起きちゃうかもしれないスリルで……ああ！！

「……んん……」

「ッッッ！！？」

一夏の声に思わず飛び退いてベッドから脱出した。

お、起きちゃったかな……もうちょっとイタズラ続けたいんだけどな……

「……くー……」

一夏の寝息が再開したのを確認してちょっと安堵した。さっきのは寝言か……起きちゃったかと思ったよ……でも、ここまで来ると……どこまでやっていいか気になるよね。

ちょっとゲーム感覚になってきた僕は、一夏をギリギリ起こさないようなさらなるイタズラを開始する。

とは言っても、さっきの抱き付きは難易度最大級のイタズラ立った気がするけど……

◇　◇　◇

一度でいいからしてみたかった寝顔撮影。

我ながら、ちょっとくだらないことをやってるとは思うけど……

……一夏の寝顔が僕の携帯に……し、しかも、待受画面になんかし

ちゃったら……きゃー！　これって恋人の特権だよね！
沸き上がる気持ちを出来るだけ鎮めながら、一夏の目の前に僕の携帯電話をカメラ機能を起動させて構える。フラッシュは抑えめに……ちょっと手で隠そう。

「……んー……」

ピントをしっかりと合わせて、撮影ボタンを震える手でポチッ！と押す。撮影音が出ないように指でしっかりとスピーカー部分を押さえているから音はほとんどでなかった。
こっそりと写真を確認して……一夏の寝顔、可愛いなぁ……こ、恋人だもんね！　待受画面に設定しちゃうからね！　起きない一夏が悪いんだから！！

◇　◇　◇

まともに手を繋げない恋人のための恋人繋ぎ、相手が寝ている内にチャレンジ。

恋人になったけど、僕と一夏ってまともに手も繋いでないからね。これは予行演習！

「……くー……」

よし、まずは掛け布団をどかさなきゃ。一夏の首の上にある掛け布団の端を掴んでゆっくりとどけた。

「……うーん……」

あ、一夏の手が布団を探してさ迷ってる。ちょっと可愛いな。
一夏の腕が少しの間空を切っていたけど、諦めてそのまま腕は元のポジションに戻った。
一夏の体制は体を丸めるように背中を曲げていて、まるでお腹の中にいる赤ちゃんみたいな格好だ。これなら手も握りやすいね。

「……それでは」

まず一夏の握り拳をほどいて掌を上に向ける。その手の上に僕の手をちょっとずらして重ねる。
さあ手を握ろう、そう決心した瞬間――――

「……んっ……」

ギュッ、と一夏の手が僕の手を強く握って――――――握って？

「っ――――！！？」

空いた手で口を塞いで声が漏れるのを防いだ。

な、なんてトラップ……不意打ちにも程があるよ……折角僕が勇気を振り絞って手を握ろうとしたのに、いきなり一夏の方から握ってくるなんて……

でも、これはこれで嬉しいな。

嬉しさの余韻に浸っていると、気づかない内に十分も経っていた。時を忘れる程ってのはこのことだね。

その後、一夏の握力がなかなか強くて手がほどけなかったけど、その手をほどいてる最中がかなり楽しかった。

◇　◇　◇

再び布団に侵入、目標の背後に接近して添い寝を試みる。

さっきは一夏の寝言で思わずベッドから飛び退いちゃったけど、今度はちょっとやそっとのことじゃ抜け出さないぞ！

「失礼します……」

先程と同じ要領で侵入に成功。うーん、この位置はやっぱりいいなぁ……一夏の背中、暖かいなぁ……それに、一夏の背中ってこんなに大きかったんだ。気づかなかったよ。

さてと、添い寝っていっても何をしたら添い寝になるんだろう？

今でも十分添い寝として扱われてもいい気がするんだけど……

「……よしよし……」

添い寝っていったらお母さんが子供にやるようなことだよね。だったら頭を撫でてみよう。どんな風にやったらいいか解らないけど、髪の毛を撫でるように優しくゆっくり……

「……へへ……」

あ、一夏の顔がすっごいニヤけてる。そんなに気持ちいいのかな、これ？

そんなに気持ちいいんだったら今度一夏にやってもらおっと。

◇　◇　◇

正面から突撃して顔を胸に埋める、彼女の特等席を確保しよう。

と、意気込んでみたのはいいものの、正面から侵入するのって相当勇気がいるよね……

「……くー……」

……こんなに僕が緊張してるっていうのに、一夏は呑気にすやすやと寝てるし……僕が起こさないように色々やってる訳だから起きてもらっても困るんだけどさ……何か納得いかないよ。

「もう、入っちゃうんだからね」

覚悟を決めて向き合うように一夏の布団に侵入する。一回は成功したんだ、もう一回どうってことはない！

「……くー……」

……よ、よし。侵入成功……あとは胸をちょっと借りるからね、一夏。

声を出さないようにゆっくりと深呼吸、早鐘を打つ僕の心臓を鎮めようとする。なかなか収まってくれないけど、今気づかれたならそれはそれで……

「……いきます……！」

もう一度気を引き締めていざ――――――

「おはようシャル」

「うん、おはようういち――――――っ！！？」

え？え！？えええ！！？

「あーもう、かわいいなぁシャルは」

「一夏！？　な、何で起きて！？」

そんな！？　さっきまでずっと寝息をたててたのに！！

「あんなに布団をばさばさされたら流石に起きるだろ」

「じ、じゃあ、いつから起きてたの？」

「んーと、手を握ってくれたあたりから」

初めの方から気づいてたの！？　じゃあ今までの寝たふり！？
全部演技だったの！？

「あ！　その！！　これは――――んむっ」

突然唇が塞がれた。それも一夏の唇で。

「ふっ……んん……！　ふむぅ……」
「ぷはっ、悪戯のお返しだ」
「ぷはぁ……いきなりなんて、反則だよぉ……」
「んー、まだ六時にもなってないな。折角だしこのまま一緒に二度寝する？」

……そんな誘い。

「断れないよ……一夏のばかぁ……」

結局、イタズラをどこまで出来るかって勝負は負けちゃったけど、箒たちが部屋に突撃してくるまで一緒に寝ることになった訳だから、ある意味勝利したのかな？

イタズラ（後書き）

どうも、じょんぺいです。

ココ最近リアルの忙しさが尋常じゃなかったので更新が殆ど出来ませんでした…

え？別作品は更新してるじゃないかって？

あれはストックがあって手直しをちゃちゃっとやって更新していたのですよ。

こっちは1から作っていたので時間がかかったのです、申し訳ないです。

そして、これからパソコンをいじれる機会が減ってしまいます。

ので、こっちの更新がかなり難しくなってしまいますので、ご了承をお願いします。

ご感想、ご意見、ご指南、お待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1901u/

IS外伝ーシャルと一夏の共同生活ー

2011年9月16日17時14分発行